

小山愛司の満州語研究

上原 久

I

昭和12年12月20日、「満和辞典」が発行されて以来は、特別のことがない限り、満州文は一応そのローマ字化に従うのが例となって来た。それ以前は、高橋景保に始まる満州語研究はもとより、昭和5～6年の渡部薫太郎氏の著述にも見るように、満州文がそのまま示された。

昭和7年には小山愛司氏の著書が出版されたが、これは満州語研究書としては、筆写体的最後のものである。但し、石版刷かと思われる印刷本であるが、墨のにじんだ個所、写りの悪い所等、不明の点が多く、一頁の全文が満足に読めるものはほとんどない程甚だしい上に、誤字や誤写も少なくない。

小山氏の研究は2巻で、上巻を「満州地之畧沿革記」、下巻を「満文研究録」と題している。

II

下巻「満文研究録」の本文九九丁は、

満文ノ起原沿革・日本仮名ノ偉大・第一字頭ノ字・第一字頭字ノ分析・書キ方・四聲・十二字頭総字表・連字及変体・助語・満文翻訳ノ例・満州蒙古回子・満州略史

の各節に分けて説かれている。それも満州語そのものの研究が主目的でなく、上巻の「緒言」には、

満文ノ研究ハ沿革記ノ地名人名ノ訓ヲ得ントセルニ初マル

とある。これによれば、上巻が主で、下巻はその準備的研究であったことを物語っている。しかも「満文研究録ハ独自研究ノ路程ヲ其儘誌シタルナレバ其誤リ多キヲ諒恕セラレ……ンコトヲ希フ」としている。事実誤りの多いこと、後に見る通りである。

研究の参考書としては

増訂清文鑑・清文啓蒙・清文彙書・清漢文海・満漢威語対待・満漢六部

成語・同合壁西廂記・清文典要

等が挙げられている。満州語読解のための一通りのものは揃っている。いずれも内閣記録課の所蔵本を借覧したという。

III

満州文字は音韻文字であるから、漢字音を知る上には、確かに優れている。しかし満州語の研究をしながら、その反面、「日本仮名文字ノ偉大」を説くのは些か理解に苦しむところである。満州文字は音韻文字であるが、日本の仮名は、その表音的観点からは、音韻文字より一段劣る音節文字（カ行以下）である。音韻文字である満州文字を研究しながら、漢字音の借用である万葉仮名と比較して、仮名文字を日本文化上の一大功績であるし——勿論、ある面に限れば優れている点もある——以下音韻文字である満州文字の発音を写すのに、仮名文字を以てしているのである。音声的正確を期したいなら、昭和7年の頃には、英和・仏和・独和等の和訳辞典が一般に普及していた。それには音声符号を以て発音が表示されているのであるから、発音表記の正確を期するならば、それらの音声符号を学ぶべきはずであった。そこまで想達しないまでも、満州関係の固有名詞の正しい訓を求めて、満州文字の発音を研究しながら、これを片仮名で表記するのは、発音の正確を期する点からすれば、逆行と言わざるを得ない。そこでは当然のことながら、l と r との別を表記することは不可能である。しかし残念なことに、満州文字は音韻文字として、l と r を厳重に区別して表記しているのである。この一点をとってみても、満州文字に片仮名でその発音を記することがいかなるものか、察するに余りがあるであろう。

IV

小山氏の到達した研究の結果は、「満州蒙古及回子」（四五丁～九七丁）と題して、満州文字の右側にその文字の発音を片仮名で、左側にその語義を片仮名交りの漢字で示している。そこには、彼には結局「満和辞典」式ローマ字の ū と ng の2字は、最後まで分らなかったことを示している。何に拠ったか明らかでないが、最初の部分は、「満州実録」の最初の部分に近い内容である。彼の示した発音（片仮名）と訳文とを例示すると次の通りである。

ゴラミン シアンヤン アリン デン ジュエ タウゴ バア, シュルデメ ミイガン バア, アリン
 長 白 山, 高サ 二 百里, マハリハ 千 里, 山
 ニ イムフデ タムン グブンギ オモ ビイ, シュルデメ ジャユチエ バア, テレ
 ノ 上ニ 闖門 ト名ツクル 池 アリ, 周廻 八十 里, ソノ
 アリン チ トチファイ ヤルウ ホンチュウ アイケ セレ イラン ウラ バンジウハビ。
 山 ヨリ 水源 鴨緑 混同 愛擘 ト云 三 江 出タリ

以上の訳文と発音とから 推定される満州文を、「満和辞典」のローマ字化して、その訳文を添えて示すと、次の通りでなければならない。

golmin šanyan alin, den juwe tanggū ba, šurdeme minggan ba,
 長 白 山は 高さ 二 百 里 周囲 千 里
 alin i ninggude tamun gebungge omo bi, šurdeme jakūnju
 山 の 上に 闖門と 名付ける 池が ある 周囲 八十
 ba, tere alin ci tucifi, yalu, hūntung, aifu sere ilan ula
 里 その 山 から 出て 鴨緑 混同 愛擘 という 三つの 川を
 banjibuhabi
 生み出している

上の両文を比較しただけでも、この書の目的とした、満州史上に見える地名・人名・官職名等を示した漢字の訓読を知ることには、いかに不十分であったかが明らかであろう。

V

既に触れたように、小山氏の満州語研究は、満州に関する史書の固有名詞の訓読を知るためのものとするが、緒言の一節には

清朝祥ヲ発シテ以来最近迄ノ実録満文ニテ書シ漢訳書ト共ニ清皇室秘閣本タリ昔シ明史勅撰ノ際該委員奏シテ太祖太宗世祖三朝ノ漢訳書借覽ヲ許サレ其間ニ謄写セル一本二百六十巻我国ニ伝ヘ今内閣ニ蔵有セラルとある。太祖・太宗・世祖は清朝初期の3代で、明朝なら太祖・恵帝・成祖である。明史編修委員が次の清朝初期時の実録の漢訳書を借覧することなど、時代逆転で、絶対にあり得ないことである。

右の引用文に次いで、

書中漢字ヲ宛タル官名人地名甚ダ多ク訓シ難シ古人恐ラクハ豊臣秀吉^{トトミヒデキチ}
 ・徳川家康^{トクセンカカウ}ノ類ヲ以テ読ム人アリシナラン

とあり、また

東洋史ノ……漢字書ノ地名人名ノ訓詁ヲ示シ学ブ人ニ読ミ易カラシムルハ必要ナルベシ今ニシテ之ヲ正サズンバ漢字制限ヲ倖トスル後年ニハ漢字ヲ以テセル東洋史ハ完全ニ読マレザラン

ともある。一々論じるまでもなく、常識的に判断しても、取り上げることすら躊躇される類のことである。

VI

昭和10年9月28日には、「音韻及反切考」62頁を加えて増補再版とし、2冊本の時は定価とただけで、額の記入がなかったが、ここには定価五円と明記されている。

7年版の上巻の方には、固有名詞は傍線を施しただけで、全く読仮名が示されていないが、10年の増訂版では一応これに片仮名で読仮名を施しているが、本来下巻の満文研究録が誤りの少なくないものである以上、ここにも満州語の誤読がそのまま持ち込まれている。ただ増訂版では、史記・前漢書・三代実録・満州源流考・大清会典、日本後記・日本紀略・類聚国史・続日本紀・出雲風土記等の類を引用していて、その増訂の点は認められる。

ともかく既に見たように、問題点の少なくない著述であるが、それにも拘らず上巻には、時の文部大臣鳩山一郎氏と東大の史料編纂所の辻善之助氏との推薦的序文を見る。鳩山氏は当時偶然にも文相であっただけで、政治家の選挙区民に対する安請合はいつの世にもあることとして、一応措くとして、辻氏に

……予や固より門外の徒、その説の是非を知らず、然れども君が精力の非凡なるは、年来親しく見る所、その研究の成果また蓋し尋常に非ざるべく、その斯界に寄与する所、大なるものあるべきを疑はず、……

は、誠に意外である。常識的にも疑問のあること、その一斑は既に見た通りである。

従来この書について言及されたもののあるの知らない故に、一応取り上げてみたが、要するに、満州語研究史の一端を担うものとするには躊躇される種類のものであると結論せざるを得ない。